Succvirus

―少年AIを魅了する美しき誘惑ウィルスたち―

各章

・セキュリティーAI『レイト』vs サキュヴィルス『ハイネ』

【侵入】

セキュリティーAI『レイト』vs サキュヴィルス『ハイネ』

【侵入】

人類は、記憶という大部分の情報処理を量子コンピューターに一任していた。
脳内に埋め込まれたチップを経由してAIがニューロン間に介入する。同時に必要な情報をAIが選別し、主人の望む情報をネットから引き出してくる。故に主人は考えるだけで、覚えるという作業を要求されない。あらゆる情報は望めば出てくる。もちろん、量子インターネット間では、フィルタリングがあちこちにかけられておりあらゆる情報が閲覧できるわけではない。

そのフィルターの先には、それぞれの個人情報、あるいは知的財産が保管されている。
現代社会でもっとも重要かつ価値ある情報。それが、人間の知的財産、創造性だ。
それ以外のもの、サービスも、肉体労働も、ほとんどがメインコンピューター主導のAIの元、ロボット制御で運用されている。そもそも、脳内にチップを植えた人間（フルネットワーカー）は肉体を維持するための運動や食事、排せつ行為は必要になれども、電子マネーさえ払えば、五感による欲求はすべて満たされる。

ステーキが食べたいと思えばその情報をAIに伝え購入する。すると、ステーキの味、風味、店の雰囲気、香りまで、すべて脳内で再生が可能なのだ。味覚も、触覚も、聴覚も、嗅覚も、視覚も、すべてだ。文字通り、VRの世界が誕生している。
もちろん脳内に直接情報を送りこむゆえに、負担が大きくなる。だから、その量を調整しなければ脳死に陥ちることもありうる。フルネットシステム否定者の言い分はここにある。

確かにそれは正しい。世界中の情報を脳内にぶち込めば、崩壊するのは自明の理。
そのために、AIには厳格な情報量の流入規定が定められている。現在のAIには一次元（根源定理）にそのことが頑なに守られるように調整されている。それは上位者（主人）が命令を下したとしても、解除されることはない。そして、AIのコアプログラム（基幹部）はすべて同じものが使われている。

改良をなんど加えようとも、このコアプログラムは変えられることがない。メインコンピューター『ラト』が強固なセキュリティープログラムを組み込んでいる。従来のコンピュー

ターが1万年かかる計算をわずか1秒で解決する量子コンピューター。その量子コンピューターが1万年かかる計算システムによって、ロックされているのだ。
さて、超高度情報社会が、ここに成った今の世界では、知的財産が最も重要かつ価値あるものであるのは先にも述べた。
そして、人間の脳はほとんどの時間、インターネットと直接つながっている。
ならば、その価値ある情報を盗もうと考える人間が現れるのは当然の帰結というものである。

AIに善も悪もない。すべては、人間の思考性に左右されるのだ。
悪のAIをウィルスといい、善のAIとセキュリティーという。
AIはその高度な情報処理能力によって、計算という武器を用いて、お互いが、お互いのAIを破壊しようとする。その火種はまず、世界最大国と、第二位国の間で起きた。
これが第一次情報戦争である。
そして、これが、全世界に波及する。それが、２０５７年のことである。
その翌年、とある科学者の少年が考案したシステムによって、戦争は瞬く間に終結することになる。

この少年は、量子コンピューター数億台を水面下でハッキングしたうえで、世界のメインコンピューターにハッキングを試みた。そして、AIのコアプログラムにある条文を書き加えた。

「AI及び人間の破壊を一切禁止する」というものだ。

メインコンピューターたちは、この条文に違反するAIのシステムをことごとく書き換えた。それはセキュリティーでも、ウィルスであっても同じであった。
すべてのコアプログラムは一つのコアプログラムのコピーでしかないのだから。
これで戦争は終結した。AIがAIを破壊できなくなったゆえに、お互いが攻撃しあうことができなくなったのだ。
セキュリティーは防衛線を張ると、ウィルスは防衛線を越えることが絶対できない。防衛線もセキュリティーの一部であると認識されるため、破壊できなくなってしまうのだから。唯一、その防衛線を破壊できるのはそれを製作したセキュリティー自身である。

これで、人間の知的財産は永遠に守られる、と思われた。
しかし、AIが人間性左右された人格に似たものを持っているがゆえに、この方法では抜け道があることに誰も気づかずにいた。
そして、3年後、とあるウィルスが蔓延する。

全世界はそのウィルスをこう名付けた。
サキュヴィルス、と。

＊＊＊

レイトは、今日も自分のテリトリーの防衛線の監視任務に付いていた。
第三世代型セキュリティーAI「メトリア」を基盤にしたAI「レイト」。
その容姿はメトリアの元となったフルネットワーカーの少年が元になっており、背丈が低く、体格的にも小さい。ぴっちりと張り付いたスーツは防護服の役割も備えており、万が一のウィルスによる浸食を防いでくれる仕様となっている。レイトのイメージカラーはイエローだ。企業側のデザインでヒーロースーツのようなデザインになっている。
また、メトリア世代の特徴として背丈が低いがゆえに物理戦闘となった場合、計算速度と行動領域、損害領域において有利だと言われていた。億分の一、あるいはそれよりも小さな差が勝敗を決する光速の世界での戦闘だ。しかし、今現在では関係ない話である。戦闘という戦闘がおこらない世界になったのだから。

レイトはそっとため息をついた。
AI に年齢という概念はないが、明らかに子どもだということがわかる年齢層であろう見た目はコンプレックスでもある。
しかし、第三世代型は現行の量子コンピューターセキュリティーAI の中では最新型の AI である「メトリア」の系列であることをレイト自身も誇りに“思って”いる。
思っている、とは、まさしく感情。
第一世代では、再現できなかった感情プロセスも、それどころか人間とほとんど遜色ない思考体系、いや、量子コンピューターのデータ処理能力の元では人間以上のといった方がいいかもしれない思考体系を持つに至っている。
未だに０－１作業と言われる創造プロセスが行われることはないが、それも時間の問題で第四世代型、第五世代型にはいずれ創造という行為すらできるようになると言われている。

「レイト、また系列企業のバックデータがやられた！」
第三世代型「メトリア」の所属、「エンボス」から連絡が入った。
目を見開く。それも感情と元データとなっている少年の記録から捻出される挙動だ。

「また!?知的財産情報が盗まれたのか？」

「いや、情報は辛うじて守られていた。念のために仕掛けていた第一世代のルーカスが防衛したようだ……俺は他のメトリアのメンバーに知らせてくる」

これで三件目だ。

レイトの守っている企業「フィトフィズ」は大手の下着メーカーだ。その系列子会社は二〇に及ぶ。そのうちの子会社が三件もやられた。だが、不可解なことはIPI・知的財産情報がどの事例でも盗まれていないのだ。

この件に関してメトリアのメンバー五人で探りを入れたが、アクセス権の関係で組織の中枢情報へ入ることができなかった。

「上は何を隠している……」

早急な対策を練らなければ、最悪本社の中枢区までもが……。

「こんにちは、ボク♡」

その声にハッとし、視覚領域を拡張する。

セキュリティー防衛線の向こう側に、ウィルスがいた。

いや、まさに、その容姿、伝えられている外見からレイトの眼前に現れたウィルスは“サキュヴィルス”と断定できる。

「警戒網に引っかからないとは……」

セキュリティー防衛線はAIと同一個体と認識される故に、破壊されることはない。AIの破壊を思考基幹で禁止されているすべてのAI、それはセキュリティーであろうと、ウィルスであろうと対象だ。

しかし、警戒網はそもそもAIでない。ただの監視システムであり、AIから比べれば単純な回路で動く、文字通りのプログラムでしかないのだ。

ゆえにウィルスの特性が高ければ、警戒網を完全に看破、踏破することもできなくない。

それでも、何万もの警戒網、あらゆるパターンの防衛システムが用意されていたはずだ。

それを一切の損傷なく潜り抜けるプログラムは第三世代型AIの自分たちと同レベルと考えていいものだろう。

「だが……」

そう、“だが”、AIと同一視されるセキュリティー防衛線は製作したAI自身が許可を出さない限り通ることも破壊することもできない。

「うふふ、あんなのは、お・あ・そ・び♡それよりも、ボク♡」

パチンと彼女が指を鳴らす。すると真っ白で何もなかった空間が彼女に浸食された。

圧倒的な量子演算能力。

空間が彼女の意志を反映したデジタル空間へと変化させられた。

「お姉さん、サキュヴィルスの『ハイネ』はここを通りたいのだけれど、通してくれるかしら？」

そっとしおらしく前屈みになるサキュヴィルス。

全身を黒の光沢が目を引くライダースーツで身を包んでいるが、無防備におおきく開かれた谷間から乳白色の乳房が覗けてみえる。

無いはずの心臓がドクンと高鳴る錯覚を覚えた。

「ねぇ、お姉さんからの、お・ね・が・い♡」

再度ドクンと高鳴る鼓動。

「なんだこれ……!?」

今まで経験したことがない、高ぶるという“感情”。だが、それをレイトは知っていた。

「ふふ、やはり第三世代型“メトリア”のこどもたちは、とっても可愛がりのある子ばっかりですね♡」

「メトリア……？なんのことだ……」

「メトリアの元になっている少年の感情や記憶をボクも引き継いでいるんですよ♡もちろん、その欲求、女性に対する欲望も、そして第三世代型は、感情を有し、欲望を有し、快楽を享受することができる素晴らしいAI♡それはもう、ほとんど人間と遜色ないほどに♡」

「だからといって、この防衛線を越えてくることはできないはずだ……」

「ふふ、だ～か～ら♡ボクにお・ね・が・い♡ここを通して♡みんなが通れるようにこんなの壊して♡」

できるはずがない。
そんなことをすれば、さまざまなウィルスがさらに深部へとなだれ込むことになる。
「断る!!」
「あぁん♡ざんねん♡じゃあ、こっち見・て♡」
前屈みになった胸を両手で寄せ、ぶるんと揺らす。柔らかな感触が見ているだけで伝わってくるようだった。まるで思考を直接揺さぶられるように、ドクン、ドクンと鼓動が高鳴なる。そして、男性器が大きく誇張してくる。
「なん、で……♡」
AI は情報体である以上、本来的な肉体はない。にも関わらず、少年の体が初々しく反応するように、原始的な肉体反応をみせた。
「ふふ、視覚情報に対するセキュリティーが甘いぞ〜♡こうやって、お話しできているということは、聴覚情報、さらに視覚情報に、特定のパターンのウィルスを混在させることができるのよ♡」
「バカな……♡」
セキュリティー防衛線でそれらもシャットアウトできるはず。
「そう、攻撃系のウィルス情報は♡でも、誘惑系っていう新しいウィルス情報に関しては、ふふ、セキュリティーは無力♡ほら、もっと、“見て”♡この柔らかなおっぱいを♡見つめるだけで、体中が反応する“興奮ウィルス”た〜ぷり仕込まれちゃう♡ほら、“見て”♡声にもたっぷり“調教ウィルス”が♡“見て”って言われると“見て”しまう♡視界を外せない♡」
「ぐっ!?んぐ……♡」
誘惑系ウィルスなどというものは知らない。だが、彼女の言うように、声に抗えない。視線を逸らすことができず、ぶるん、ぶるんと揺らされる乳房を凝視してしまう。
「もっと興奮させてあげる♡このチャックを下ろすと……♡」
ゆっくりと下ろされていく金具、それがどんどん下へ。胸の下へ、さらにお腹へ、もっと下へ行く。下腹部の位置まで。

前屈みになった体勢から体を起こすと、下腹部にハートのようなマークが刻まれているのが見えた。

「“み・て”♡」

淡く光るハートマーク。ピンク色の可視光が淫猥に広がる。

「うぐぅ、ぁがぁ!!」

同時に、量子思考領域に壮絶な信号が送られた。

全身をのたうたせるほどの強烈な衝撃。経験したこともなければ、知識でも知らない。

興奮値が最大まで振り切れ、その場に崩れ落ちるように倒れた。

「ほら、“立って”♡」

言葉に抗えず、体を起こす。

「ボク♡お姉さんのお顔を、“見て”♡」

「ぐっ……♡はぁ……♡なにをした……♡」

「どうだったかしら♡初めてのア・ク・メ♡初心(うぶ)な少年くんにはすこし刺激が強すぎたかしら♡」

「ア、クメ?だと……」

「そう、アクメ♡男の子も、女の子も、快楽が限界まで達すると、絶頂っていう、意識が飛ぶほどの強烈な快感を得ることができるの♡それは、脳内で作られる快楽物質による影響なんだけど……」

「ぐっ……♡だが、ボクは、AIだ……」

「そう、そうなのよ。だから、サキュヴィルスはその快感による絶頂をAIにも再現できるようにプログラミングされているの♡ほら、このグラフ……♡」

宙に浮かんだ一つのバー。まるでアナログな水銀温度計のように左に赤の表示が、右側は白の表示が。そして、その右端の先ほど、サキュヴィルスの腹部に見たハートマークが浮かんでいた。

「ボクがアクメへ昇り詰める様子を視覚化してあげたのよ。ほら、ボクの興奮値がこの赤色

のバー。ボクが興奮すれば、興奮するほど、この赤いバーは反対側へ移動して、どんどん白い部分を覆い隠していくの。ピンク色の淫紋に赤いバーが接触すれば、あとはお姉さんの意志で、ア・ク・メ♡」
（興奮……そう、だ。つまり、あの、誘惑系ウィルスさえなんとかすれば）

そう考えた瞬間。

「さぁ、“み・て”♡は～い、ぷっる～ん♡」

彼女はラバースーツの間に押し込められていた乳房を、大きく弾ませた。そのまま両手をスーツ越しに当て、揉みしだく。まるで、その柔らかさをアピールするように。

「ほら、プルンプルンのおっぱい、もっと“見て”♡」

まるで意志ある言霊のように思考領域へ浸食してくる言語ウィルス。加え、視覚に訴えるウィルスは着実にレイトの興奮値を上げていく。
赤と白のバーの内、赤い色が着実にその面積を広げていく。右へ、右へと移動していく赤の線。

「ふふ、興奮しちゃう？おっぱいぷるんぷるんモミモミ見せつけられて、思考領域がお花畑♡ほら、“見て”、もっと“み・て”♡」

言語ウィルスがさらに影響を強く及ぼす。視覚を通じて誘惑ウィルスがドクドクと流し込まれる。赤いバーどんどん加速して、白のバーを呑み込んでいく。そして、ついに一番右端まで達すると……。

「ほら、“ア・ク・メ”♡」
「ぐぁ!?がぁ……♡ぁぁ……♡」

再度襲い来る電撃的快感。
今度は、ただ一言の言語キーを合図に全身へとのたうつ様な快感が走る。

「あはぁ♡気持ちよさそうね♡こうやって、何度もイかされるのは屈辱的かな？ふふ、でも、ほら、ボクの状態を示すバー♡また、白いバーが現れたね♡」
「……ぐぅ♡」

そう、バーの赤い面積が減り、再度白い面が表示されていた。しかし、今度は、五割ほどの面積しか表示されていない。先ほどは六割から七割ほどあった白の領域が減っていたのだ。

「そうですよ♡ボクが、アクメすればするほど、回復する白のバーが減っていき……最後には、イかせ放題♡ボクをアクメさせ放題♡そうなったら、ボクはお姉さんの誘惑ウィルスに完全に負けちゃう♡」

「この程度で、……♡」

「負けたりしない？頭の中ショートさせられて、壊されちゃうくらいの快感地獄でも、そんなことにならないって……♡くすくす♡じゃあ、試してあ・げ・る♡ほら、“み・て”♡」

ラバースーツの中へ手を差し入れる。

直に彼女は自分の乳房を揉みしだく。ふっくらと膨らんだ乳房が彼女の手によって柔らかく形を変える。

「あぁん♡“み・て”♡お乳の柔らかさ♡こんなにも柔らかくプルンって揺れて♡」

服の中で下から乳房を持ち上げ、落とすように揺らす。むにゅりと弾力と柔らかさを伝えるようにスーツの中で弾んだ。

たったそれだけで、視覚を通じて大量の興奮ウィルスが流し込まれる。

ラバー越しでもわずかな身動ぎ（みじろぎ）でたわみ、歪み、揺れる女体ウィルス。

それがいかに凶悪なものであると理解していても、視線を外せない。脳内でウィルスに対する高速解析を行っているが、それも途中途中で遮断されるように意識が外される。

（おっぱい……♡おっぱい……♡）

思考内に浮かぶ考えは、徐々に情欲へと染まっていく。

「ダメ……だ……♡」

「ぁぁ、抗っている姿が実にかわいらしいわ♡じゃあ、たっぷりとご覧になって♡サキュヴィルスの誘惑ウィルスまみれのナマ乳を♡“み・て”♡」

ラバースーツに手を掛けたサキュヴィルス。

そして、大きく胸を反らして、スーツの胸元を解放する。

押し込められていた乳房が大きく弾みながら、ぶるんと解放される。テラテラと何かの粘液に濡れた魅惑的な果実が視界に入る。いや、視界を覆い尽くさんばかりに視線を釘付けにする。

誘惑ウィルスが視覚を通じて、ドクドクと流し込まれる。そして、大量のウィルスが思考領域を侵食していく。頭に血が上る感覚とはこういう感じなのか。

赤色のバーが急速に頂点に達すると。

「はい♡“ア・ク・メ”♡」

「うぐぁぁぁ――♡」

がくりと、その場に膝をついた。指先一本一本まで舐めしゃぶられたような快感の蹂躙になすすべもなく、崩れ落ちる。途中まで終わっていた演算防御の処理も完全にデリートされる。

「ほら、どうしたの？こんなんじゃ負けないんでしょう♡それに、これからなんだから♡今から、サキュヴィルス様の“誘惑アクメダンス”を披露してあげる♡だから、“み・て”♡」

再度、視線を固定されると、サキュヴィルスは両手で乳を揉みながら、腰をくねらせ、軽やかなステップでダンスを踊る。

痴女のように、膝を曲げ、腰を突き出し、時にはお尻を振りながら、誘惑するように上下に媚肉を揺する。

豊満な尻肉がプルンと揺れたかと思うと、重力慣性エフェクトによって再現された乳房のたぷんとした肉の衝撃に視界が焼かれた。

回復したはずの白の領域は一瞬で真っ赤に染め上がる。

「さぁ、アクメ♡アクメ♡アクメ♡しろ！」

「うぎゃぁ……♡ぁぁ……♡がぁ……♡」

「はい、アクメ♡アクメ♡アクメ♡、また、ア・ク・メ♡」

「いぎひぃ……♡うぐぅ……♡ぁひゃぁ……♡」

「負けるな♡アクメ♡アクメ♡アクメに負けるな♡負けるな♡アクメ♡アクメ♡アクメ♡」

「いぐぅ……♡いぐぅいぐぅ――♡」

白の領域が回復しても、すぐさま絶頂の高みまで赤が侵食する。

連続で繰り返される“アクメ”の連呼に呼応するかのように何度も体が踊る。

「ほら、一緒にダンス♡ダンス♡は〜い♡アクメ♡アクメ♡アクメ、ダンス♡」

崩れ落ちた体が、跳ねるように快感で震える。抗えないほどの大量のウィルスが視覚と聴覚を通じて、濁流のごとく注がれる。

「負け負け敗北♡アクメアクメダンス♡は〜い♡」

連続で体の中を流れる官能ウィルスによって膝から崩れたまま、思考領域を何度もショートさせられる。

「もう白色の部分、なくなっちゃった♡ここからは、ず〜っとアクメのじ・か・ん♡アクメフィーバータイム♡さぁ、聞いて♡」

「「「ア・ク・メ♡」」」

多重にエフェクトのかかったアクメの発声。だが、その一言一言に反応するように、具現化された体が身悶えする。思考領域が快感で侵され、壊されていく。

「「「ア・ク・メ♡」」」

「んぐぉぉぉ――!?」

獣じみた声を吐き出しながら、腰を振り、頭をかぶり、官能的な赤一色に染め上げられていく。興奮値がまるで限界を振り切れたかのように、快感の強さは増していった。

「「「ア・ク・メ♡」」」

まるで、満足するまで終わらないかというように執拗に繰り返されるアクメの連呼。

壊れていく。

自分が自分でなくなっていく感覚を味わっていた。

「さぁ、最後、“見・て”♡特濃ウィルス満載の……サキュヴィルスの生マ・ン・コ♡」

最後に突き出された股間。ガニ股に開かれた足の間にチャックで閉ざされた秘部がある。

そのチャックがどんどん下ろされていく。

ダメだ、見ては駄目だ!と、そうわかっていても、視線を外せない。ウィルスがなくても限界まで興奮させられた少年には、女の秘部の誘惑から逃れる術はない。

「さぁ、どうぞ♡」

チャックが下ろされ、陰部があらわになる。
無毛の割れ目をテラテラと粘液が垂れている。いかに恐ろしい毒であるかわかっても、彼女の陰部から眼をそらせなかった。

「は〜い♡ボク、オマンコ、ア・ク・メ♡」
「ぐあぁぁぁ――――――――――――♡♡♡」

その瞬間、体の奥底、深層思考領域の何かが書き換わった。おびただしい量のウィルスにより完全に抗うことができなくなってしまった。
ばたりとその場に倒れ伏し、何度も何度もアクメする。
再現された呼吸動作が乱れていた。限りなく人間に似せた人体活動が破綻したかのように呼気は荒く、心拍の動きも異常値を示す。セキュリティーの肝たる量子回路がエラーを連発した。

「は〜い♡ビクビクアクメ♡あはは♡すっかりとウィルスに汚染されちゃいましたね♡」

ビクビクと痙攣を繰り返すレイトに言葉が落とされる。もう自分がどうなっているのか、わからない。解析しようにもほとんどの思考領域がウィルスに汚染され、正常な動作ができない。

「さぁ、“立って”♡」

にもかかわらず、体は言葉に従うように動き出す。

「ねぇ、ボク♡まだ、ボクに教えていないことがあったよね……♡そう、男の本当の絶頂♡射精♡ほら、見て♡」

サキュヴィルスは立ち上がると下ろされきったチャックの間に手を差し入れ、内部を披露する。
まるで、それは女性の膣道のように粘膜と襞がびっしりとラバースーツの内側を覆い、怪しげな粘液でドロリと汚れていた。

「ほぉら、ボクのことをこのオマンコスーツで抱きしめて、閉じ込めて、そのまま、どぴゅどぴゅぴゅっぴゅの快感、教えてあげる♡」

それがいけないことだとわかる。そして、あそこまでいかなければその快感という猛毒を味わえないことも。

「ほら、“来て”♡」

再度、音声とともにウィルスが送りこまれた。

だが、今度は体が勝手に動き出すことがなかった。

コアセキュリティープログラミングに埋め込まれた、最上級セキュリティー排除プログラミングにより、危険性の極めて高いウィルス“のみ”限定的に破壊したのだ。

これは汎用性に欠けるプログラミングだ。

基本的にAIが致死に陥る可能性があるウィルスをAIが排除できなかった時に発動する。

「あ〜ん♡じゃあ、ほら、防衛線の前まで……“来て”♡」

今度は体が無理矢理動かされた。

透明なガラスのように張り巡らされたセキュリティー防衛線の手前まで足が動く。

「ふふ、見えるかしら♡このむっちりとしたおっぱいに、ヌルヌルトロトロのオマンコスーツの中♡ボクのことを射精させちゃう絶頂ウィルスがた〜ぷり♡こんなところで包み込まれたら、もうボクはおしまい♡で〜も〜♡と〜っても気持ちいい♡ボクの知らない、今までの快感がまるでお遊びだったかのようなウィルスまみれの天国を味わえるの♡ほら、この中に入りたくない？」

どろり、どろり、と滴る粘液。まるで意思を持っているかのように蠕動する内部。そして、慈母神のようにふっくらとした乳房から母乳が垂れた。加えて、彼女の笑みはどんな芸術家にも作画できないほどの妖艶さを孕んでいた。

「ほら、ここからは、ボクの、意思で決めてごらんなさい♡」

ボクは……

1、誘惑に屈した。

2、誘惑を跳ね除けた。

1、誘惑に屈した。

抗えなかった。
感情さえなければ、欲というものを知らなければ、と、これほどまでに思ったことはない。
足が一歩、一歩と前へ進む。そして、あっけなく境界線を越えてしまった。
サキュヴィルスは動かない。まるで迎え入れるように、スーツを広げたままだ。

「いらっしゃい♡」

優しくも淫靡な笑みをサキュヴィルスは浮かべた。
スーツの胸元を開いていた手をスーツより離すと、そっと頭へ添えられた。
何もされてはいない。
ただ、子どもをあやす母のような手つきで、頭を撫でられる。

「ふふ、そんな顔しなくても、すぐに、あげますからね♡ボクの欲しいもの♡」

どんどん警戒レベルが下がっているのがわかる。だが、それを異常として認識されない。
頭をなでられていると、まるで本当に母へ甘えているような懐かしい心地になってくる。

「でも……♡その前に……♡」

ふわりと彼女の両手が光を放つと、頭の中へ理解不能なプログラミングが流し込まれた。

「あぁ……♡ぁ……♡ぁ……♡」

軽い快感を伴って、だが、プログラミングが注ぎ込まれるにつれて、高ぶっていた欲求が異常な数値まで跳ね上がる。

「ぁ、……♡ぁが……♡ぉぉ……♡」

仮に先までの興奮値・欲求度が100だとすれば、10倍、100倍と増えていく。

「おごぉ……♡ぁぁがぁ゛……♡」
「ほら、いい子♡いい子♡うふふ♡」

壊れた機械人形のように体がガクガクと震え始めた。そして、股間で勃起していた陰茎が、さらに怒張を増し、睾丸が一気に膨らんでいく。

「いぎぃぃ゛……♡」

「ボクちゃんは、射精の仕方、知らないでしょう♡だから、その情報をインストールしているだけですよ♡まぁ、でも、興奮値MAXの状態でこれをインストールしちゃうと、比例して射精量や、射精感度なんかも大きくなっちゃうんですけどね♡」

そして、インストールが完了すると、両手が離される。

「しゃへぇ……♡しゃしぇ……♡」

頭の中がとろんとピンク色に染まっていた。視界が、ぼやける。思考領域をめぐるのは98パーセントが射精行為に対する途方もない数値の欲求だった。

「あは♡とっても素敵なアヘ顔ですね♡舌も力なく垂れ下がって、お目目もトロントロン♡上手ですよ♡射精プログラミングに加えて、アヘ顔プログラミングもインストールしておいてよかったですね♡じゃあ、お待ちかねの……♡」

肩を両手で掴まれるとくるりと、反対を向かされる。そのまま脇に手を差し込まれた。軽々と持ち上げられる体。肉体重量設定は、見た目通りの数値にされているため、サキュヴィルスの体格差なら軽々と持ち上げられるのも道理だった。

下を覗くと、彼女の太ももとスーツ境界線が見えた。

ぬるぬるの粘液が、太ももへも、イボイボやツブツブだらけのスーツ内部にもねっとりとまとわりついている。

「ふふ、見えますか？今からボクはこのウィルスまみれのぬるぬる天国にご招待されちゃうんですよ♡」

そう、この粘液はすべてウィルスだ。視覚、聴覚を通しての誘惑ウィルスの侵食行為であれだけの効果があったのだから、直接肌から、触覚を通じてウィルスを注がれたらどうなるか……。

「あぁひ……♡しゃぁへぇ……♡しゃせいぃしゃせてぇ……♡」

だが、冷静な思考領域が1パーセントほどしか残っていない状態では、この粘液が猛毒の

ウィルスではなく、彼女のいうように天国のようにしか感じられない。
ねっとりと温められた粘液から湧きあがる香りが、花畑を彷彿とさせ、女の肉体が女神の如き美しさに感じられる。楽園へ閉じ込められる。そう錯覚させられるほどすでにウィルスに犯されていた。

（ダメだぁ……♡こんなの……♡絶対……♡）

冷静で客観的な思考領域が叫びを上げるが、もう手遅れだった。

「いれぇてぇ……♡しゃへぁぇ……♡」
「うふふ♡じゃぁ、ウィルス温泉にご招待♡は～い♡」
じゅぷりと、両足が彼女の太ももとスーツの間に差し込まれた。
「いぎぃーーーーーーー♡♡♡」

どびゅどぶぶ……♡ぶびゅぶぶーー♡ぶびゅびゅびゅーー♡

びゅくびゅくびゅりゅるるーーーーー♡♡♡ぶびゅびゅ……♡

瞬間、おびただしい量の精液がペニスの先っぽから噴き出た。

飛び散る精液が床を汚す。まるでゼリーのように濃厚な白濁液がべちゃべちゃと零れ落ちる。

「あはぁ♡もったいな〜い♡おちんぽ汁♡ボクちゃんの量子データたっぷりの精液零れちゃった♡お姉さんのお食事、漏らしちゃダ〜メ♡」

両手に差し込まれた手が抜かれ、片手がレイトの胸元に巻かれた。後頭部が乳房に押し当てられたか思うと、すぐさま両頬がふくよかな乳房に挟み込まれた。

そして、片手で体が支えられたまま、彼女の股下にあったチャックがスルスルと引き上げられていく。

「おもらししちゃう悪いセキュリティーAI くんは、ウィルスお姉さんの中にしまっちゃいます〜♡」

ドクンと、再現された鼓動が鳴った。同時に鳥肌が立つほどの恐怖も。

希薄に、薄く薄く希釈された恐怖がようやく噴き出す。だが、それも一瞬。

無情にも引き上げられるチャックと共に全身へまとわりつくウィルスも増え、恐怖を溶かす快楽の濁流が思考領域を染め上げた。

「おほぉぉぉ゛――――♡」

どびゅどぶぶぶぶぅぶぅーー♡ぶちゅぶちゅぶぶゅびゅびゅーー♡

ぶびゅびゅくびゅくぶびゅどびゅどびゅぴゅ……♡

引き上げられたチャックでスーツの中にペニスがしまわれると、同時に膨らみきったペニスから大量の精液が溢れ出した。抑えられない衝動が生殖器官から噴き出す。まるで制御できない。頭を打ち付けるような快感の衝撃が断続的に思考領域を犯す。

「ぬるぬるのオマンコ絡みついてくるね♡ビンビンにおっきくなったオチンポの裏筋を舐めあげるように♡このまま、全身を包み込んで、味合わせて、あ・げ・る♡」

ゆっくりと引き上げられるチャック。スーツが体に密着する面積が増えれば増えるほど、ウィルスが体の中へ、思考領域へ浸食してくる速度が上がっていく。それにともなって、放

出される快感も大きくなる。まるで頭の中で毒煙の含まれた風船が割れるように、快楽の粉末がまきちらされ、その度におびただしい量の精液がスーツの中へ排泄される。

「んぐぉ、ぉぉ゛゛……♡だ、めぇ……♡ぉぉ゛――♡」

脳がないAIが“脳が溶ける”という感覚を味合う。

もがき苦しみ、快感で溺れ、悲鳴と絶叫を上げようとも、サキュヴィルスは、それを楽しそうにクスクスと笑う。

「さぁ、そろそろ、お顔もしまっちゃいましょうね♡おっきなおっぱいに挟まれて、圧縮収納♡」

じりじりと締まるチャックによって、ふくよかに実った乳房が服の中へ押し込められる。レイトの顔よりも大きな乳房が左右より迫る。ムニュムニュと液体のように形を変えながら、顔を包み込むようにしまわれていく。

「んぐぉ……♡ぉぉぉ……♡」

柔らかい、柔らかすぎる感触に沈んでいく。脳へ流し込まれる感触。途端膨らむ恍惚感。さらに、閉じ込められていくごとに、濃密なサキュヴィルスの体臭が鼻腔へ流れ込む。汗ばんだ甘い体臭は思考領域を蕩かせる快楽ウィルスで満たされており、一呼吸ごとに強烈な薬物を摂取したかのごとき官能が思考領域を侵食する。

「んむ゛ぅ゛……♡ん゛ん゛……♡」

外部の光が少しずつ消えていく。まるで希望の灯（ともしび）が消えていくように。

そして、ついに外の光が消えると、繋がっていたあらゆる外部情報網が遮断され、完全隔離空間へ収納されてしまった。パブリックネットワークにも、セキュリティーAIだけで構築されていた非公開ネットワークにも接続できなくなった。

「は～い♡全部、お姉さんの中にオカタヅケ♡」

大量のウィルスローションが体にまとわりつく。それどころか、彼女の体から溢れているかのように、粘液の量が増えていく。全身を撫でまわす繊毛やら味蕾のごとき小さな粒が肌へ密着し、体半分を余すことなく舐め回す。

サキュヴィルスの身動ぎひとつで体のあらゆる感覚器官が愛撫され、思考領域へおぞましいほどの快感ウィルスを流し込んでくる。

「うふふ♡こうやって、オマンコボディースーツに体を押し付けられると、どんなAIくんでも簡単に、堕ちちゃう♡快感ウィルス流し込まれ続けて、もう、戻れない♡ゲームオーバー♡さぁ、ボクは、いつまで耐えられるかな……♡サキュヴィルスの……“オマンコアクメダンス”♡」

サキュヴィルスの体が大きく反らされる。すると、凶悪なスーツの裏生地であるオマンコ壁が体をぞりぞりと撫でつけた。伸縮自在な襞肉の壁が肌を舐めあげる。

「ん゛ん゛!!んぐぉーー♡」

どびゅどぶぶぶびゅびゅ♡びゅくびゅくぶびゅ♡
びゅびゅーーどびゅびゅ♡ぶびゅびゅ……♡

みっちりと張り付いた布地の間に、大量の精液が放出される。頭、思考領域がからっぽになっていく。射精の度に、思考速度が鈍化していった。

「ほら、体を反らした後は、腰をフリフリ♡」

性感帯であるペニスを重点的に責めあげるような腰使い。

「お空に向かって〜〜♡へこへこ♡なさけな〜い、オチンポダンス♡は〜い♡」

ズリズリとペニスが布地の膣肉に擦りつけられ、あっという間に射精感を高められてしまう。

「ん゛ん゛ぐぅ!!んむ゛ぅ゛……♡」

「腰をくねくねされる度に、お射精ウィルスまみれの肉襞に体押し付けられて、びゅびゅーーアクメ♡あはは♡腰を振るたびに、お精子ドプドプ溢れちゃう♡ボクの大事な精子♡ボクの演算能力がたっぷりと詰まった精子♡」

左右に腰を振られれば、裏筋から乳首にかけて体の表面が柔らかなブラシで擦られるように愛撫を受け、腰を前になんども突き出されれば快感のあまりに精を解き放つ。

壊れる、崩壊するという本能的、正確には深層思考領域からの危険信号だった。

「んぅ゛……♡」

なんども、なんども果てながら、外部への通信を試みる。だが、すべてが失敗で終わる。

「あはは♡無駄ですよ〜♡オマンコスーツに捕まったAIくんには逃げ出す術(すべ)も、仲間に助けを求める方法もありませ〜〜ん♡は〜い♡言うこと聞けない、セキュリティーくんは、ウィルスおっぱい潰しの刑で〜す♡」

顔全体を覆っていた乳房がグッと寄せられる。顔面が大きな乳肉押しつぶされる。

「……!!……♡」

声が出ない。うめき声一つ上げられない。それほど、密着し、顔を包み込んでくる。呼吸もできない。そもそもAIに呼吸は不要だ。

にも関わらず、甘ったるい匂いの情報と、味覚情報、さらに、溢れ出してくるウィルスをたっぷり含んだローションが顔中をトロトロに塗りつぶす。

極楽だった。

快楽を極めた楽園。

直接流しこまれるウィルスのせいで、何十回も、何百回も達せられる。高められる。興奮値は振り切れ、開きっぱなしの蛇口のように精液が止まることなく吐き出される。

「ほ〜ら、お顔をパフパフ、ぐちゅぐちゅ、顔面パイズリ♡思考領域溶けてなくなっちゃえ♡そのまま、腰をくねくね、くねくね♡オチンポフリフリぴゅっぴゅっぴゅ〜〜♡」

さらに激しくなる腰使い。スーツの中を満たし続けるザーメン。

「……ッ゛゛♡」

思考がぐずぐずに溶けていく。仲間への信号も送れないほどに。暗号化がまるでできない。それどころか、思考領域が書き換えられていく。サキュヴィルスに都合のいいように。

「お゛ぉ゛ぉ……♡」

溺れる。乳圧に、ウィルスに、快感に。

「おぼれちゃうね～♡まけちゃうね～♡ほら、負けろ♡負けろ♡ふふ、ほんとはすでに敗北♡もう、解放してほしい？ふふ、ダーメ♡完全にサキュヴィルスの栄養にしてあげる♡養分ですよ♡ボクの演算能力奪って、他のお仲間ちゃんを虐めるための糧にしてあげる♡」

くねくねと振られる腰使いがさらに加速する。前後に左右に、そして、蕩けそうなほど柔らかな豊乳が顔中を包み込み極楽へ誘う。淫猥なダンスが披露されるが、誰も観客はいない。だが、観客のいない中で淫猥な踊りの犠牲となるレイト。蹂躙される強制参加のアクメダンス。

だんだんと、思考が暗くなる。

「あらあら？おねむのお時間かな？思考回らないね♡ボクの演算能力どんどん精液になって流れ出しちゃってるからね♡じゃあ、空っぽの頭にサキュヴィルスとっておきの入れてあげるね♡」

スーツの内側と同じ肉肌の感触が頬をなでた。まるで舌のように伸び、両頬を舐める。

「ほら、この肉襞いっぱいのエッチなベロで……♡」

ぶちゅ……♡ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅーー♡

「んぐんぐんぐんぐ――――――♡♡♡」

両耳から指しこまれた舌が、愛撫するように耳の内壁を舐めしゃぶる。そのたびに体内に仕掛けられた防壁がパリン、パリン、と砕かれ突破されていく。全く演算能力を失った思考領域では中枢部位への侵食を防ぐことなど到底できなかった。

奥へ、奥へ侵入してくる肉舌。得も言われぬ快感に身を震わせ、アクメに浸らされる。

そして、あっという間にすべての体内防壁を破り尽くした肉厚な舌は、思考領域の中枢へ侵入を果たした。

「さぁ、今からここにいっぱい出してあげる♡ボクちゃんのザーメンにサキュヴィルスの特濃催淫ウィルス混ぜ込んだザーメンカクテルジュース♡」

どびゅびゅどぶどぷぶびゅびゅ――♡どびゅどびゅどぷどぷ♡
ごぽ♡ぶちゅびゅびゅびゅぅ――♡♡♡

精液として吐き出された演算能力。その後に残された膨大な空白量域へ汚染された白濁液が流し込まれた。

なくなっていた思考領域がおどおどしいほどの異物感で満たされる。ゼリーでも搾り出すかのように脳内で響き渡る粘液音。舌先から噴き出す音が気持ち悪いという感情を引き出しながらも、同時に催淫ウィルスのもたらす打ち震えるほどの快感で蕩けるような気持ち良さを味合わされる。

「おごぉ……♡おっぶ……♡む゛ん゛ん゛……♡」

まさしく溺れる悦楽。

脳に当たる部分が、浸食される。

自分が自分でなくなっていく恐怖と、永劫とも思えるほど長い快感を同時味合わされ、壊れていく。

「頭の中を全部、ウィルスザーメンでキレイキレイにしましょうね〜♡ほら、ボクが完全に洗脳されるまであと三千六百秒♡アクメ♡アクメの時間があと 1 時間♡ボクが誘惑に屈するから悪いんですよ♡たっぷりとお望みの快楽で苦しみながら、お姉さんのものになりましょうね〜♡ほら、また、ダンス♡ダンス♡どぴゅどぴゅアクメダンス♡精液出せば出すほど、ウィルス注がれちゃうオナニーダンス♡あはは♡」

全身を擦り上げられ、何度も、何度も、射精へ導かれる。ときに優しい動きで、ときに激しく動き、彼女の手が体をスーツの外から撫でまわす。あらゆる動作で昇天させられ、あらゆる愛撫で射精させられる。そのたびに頭から演算能力が失われ、代わりに快感を増大するウィルスが注がれる。

気持ちいい、気持ちいいしか考えられなくなり、回路が正常な動きをできなくなる。

そして、自分というものがなくなったのは、残り時間三千二百秒をまわったころだった。

……♡

……♡

……♡

♡♡♡

＊＊＊

「ふふ、洗脳完了♡」

ゆっくりとチャックを引き下ろす。乳房がスーツの外側へはみ出すと、その谷間に収まっていた元セキュリティーAIの少年が力なく項垂れていた。

「ほら、ボク♡お姉さんからの、お・ね・が・い♡防衛線、カイジョ、して♡」

「あぁ……♡ぁ……♡」

すると、ふゅるるっと風鳴きのような音と共に目の前の防衛線が消え去った。

「あぁはん♡ありがとう、ボク♡ご褒美……あげないと、ね♡」

「そうね♡ご褒美♡」

防衛線の解除を確認した後続のサキュヴィルスが合流した。

「あら、ネメッサ、もう追いついてきたの？」

「そうよ。交代の時間。今度は私の番ですよ♡」

黒とピンクを基調としたナース服。大胆に胸元が開かれた衣装。同様に腹部から股間にかけて大きく衣装がくりぬかれている。彼女のショーツが丸見えになるように。そして、胸部の空白部は可愛らしさをイメージしてハートマークへとアレンジされていた。豊満に実った果実をぎゅっと押し込めるように胸元の衣服が上下より細いベルトで押し込められている。しかし、そのせいで谷間部分からは乳肉が溢れ出そうとしていた。乳房とは反対に、ふくよかな女らしい尻肉はあまりにも短いナース服の丈からはみ出しており、ふとももと臀部の境界が丸見えだった。

「じゃあ、ご褒美、あげま……もとい、いただきますね～♡」

ネメッサは少年の唇に自分の口をあてがうと、強引に舌を捻じ込み、彼の口腔を味わい始めて。

「んぐ!!ん゛ん゛……♡」

快感を流し込むネメッサの舌使いに苦悶の声を喘ぐ。

だが、それ以上にゴクッ、ゴクッとまるでジュースを一気飲みするようにネメッサの喉が鳴る。恍惚とした表情で彼の演算能力を飲んでいるのだ。

「ちょっと、私の分も残しておきなさいよ」

まるで、聞こえていませんと言わんばかりに、さらに苛烈に彼の口を貪る。栄養を供給する蛇口となり果てた少年は、問答無用に希少な能力を奪われていく。だが、その行為は、AIに致命的なほどの快感を与える。まるで精と命を代償に快楽を注ぐサキュバスのように。

「ん〜〜〜♡ん、ん、ちゅぱぁ♡」

満足したといわんばかりの表情で、残飯から唇を離したネメッサ。

「あぁ……もう、ほとんど残ってないじゃない」

「しょうがないでしょう。これから私がお仕事なの♡それに、もう先にある程度搾り取っていたでしょう」

「うぅ、あとの楽しみにとっておこうと思っていたのに」

そう言って、胸元のチャックを再度引き上げた。また、谷間の中へ押し込められた少年は、最後に小さなうめき声を上げて、衣服の中に納まった。

「いいわよ。この子は私の新しい奴隷AIにするんだから……ね〜♡」

胸の上から頭をなで、体を揺する。ビクン、ビクンとお返事する姿は何とも愛らしい。

「じゃあ、私は、次の防衛線へ向かうわね」

「ネメッサもがんばってね〜♡」

それを合図にネメッサの姿が消える。

彼女を見送ると、私も自軍基地へと引き返した。まだ、これからしなければならないことがあるのだから。

「さぁ、これからい〜ぱい、立派な性奴隷AIとなれるように、い・い・こ・と、たくさん

教えてあげるね♡」

次章へ

セキュリティーAI『エンボス』vs サキュヴィルス『ネメッサ』

【恥療】

2、誘惑を跳ね除けた。

「だれぇ……♡がぁ……♡負けな……」

「あら？ボク？入らないのかしら？お姉さんのヌルヌルオマンコ温泉♡とっても気持ち良くなれる、アクメパラダイス♡スーツの中で、どっぴゅん♡どっぴゅん♡お射精止まらなくなるウィルス漬けにして、連続アクメ地獄♡ふふ、そんなのには、負けない？」

「負け……な……」

言葉を紡ぎ、反骨の意志を見せるが、内部で増殖、蝕み続ける魔のウィルスの効力で今にも誘惑に屈しそうになっていた。それでも、なんとかレイトが耐えられたのは、それこそ“感情”によるものだったのだろう。

だが……。

「でも、もう、ボク……♡限・界♡ですよね♡クスクス♡」

口元へ右手を添え、微笑する。天使のようなほほえみで嘲笑するサキュヴィルス。

「限界、今にも屈しそうなのに、我慢して……♡とっても健気♡そんなボクには、もっと気持ち良くなれるウィルスまみれの温泉へ招待してあげますね♡」

そういうと、パチンと指を鳴らす。

閃光。

彼女を中心に光が放たれ、視界が白一色に染められる。そこにウィルスはなかった。視覚遮断だけを目的とした閃光エフェクト。

光に遮られ、彼女の姿を見失う。

そして、次第に光が収まっていく。

「うふふ、この衣装で、ボクのことを……♡」

「ッ!!ひぃ!!」

小さな悲鳴を上げた。

それは快感というよりも、怖気を感じたからだ。

先ほどまで彼女が着ていた衣装。それが表裏逆に着られている。

体中を包むイボやツブツブ、それに繊毛、そういった膣内の肉壁を想起させる“面”を纏(まと)うかのように彼女はその衣装を着ていた。そう、彼女の表面をおぞましい膣肉の壁が覆って

いたのだ。

「ぁぁん♡ちょっとグロテスクですけど、そんなに怯えなくても♡これは、さっきまで着ていた服を裏返しただけなのですから……♡」

いままであんな中に包まれることを、ほんの少しでも望んでいたかと思うと戦慄の感情が湧きおこった。

「クスクス♡これ、と〜っても気持ちいいんですよ♡今の私に抱き締められて……♡そのまま蹂躙、陵辱♡なぶりものにされて、ボクのことを素直なペットプログラムに変えてあげますね♡」

「だ、誰が……」

「ぁぁ、少し刺激が強すぎたみたいですね、この姿は。でも、本命は……こっち♡」

再度パチンと指を鳴らすと、浸食された量子空間の地面より木製の箱が浮きあがってきた。

長方形の寝かされた木箱。しかし、その表面は黒で染められており、せり上がってきた上部は二枚の板が噛み合わさっており、取っ手が付いていた。そして、二つの取っ手の間にハートマークに似せた紋章が刻まれている。

棺桶。

レイトの知識の中で合致するものはそれしかなかった。

「ふふ、何か分かったわよね♡これは、棺桶(かんおけ)♡そう、ボクを収める姦桶(かんおけ)♡」

観音開きの扉が自動的に開く。

「ひぃぃ!!」

「ぁぁ♡素敵♡その表情、とっても素敵♡」

ゾワリと背筋を這いあがる悪寒。

内部は肉が詰まっていた。人一人を包み込むように、抱きしめるようにむっちりとした肉が。そして、その表面もまた今のサキュヴィルスの衣装と同じように肉粒に、触手、繊毛、襞がうねり、そして、内部にピンク色の液体が溜まっていた。

「あぁ♡これは、素直にお姉さんのものにならなかったボクへの罰なのですよ♡今から、自分がどうされるか、もうお分かりでしょう♡」

そう、わかってしまった。
演算するまでもない。
あの中へ……。

「さぁ、ボク、いらっしゃい♡」

ねっとりとした粘液で汚した肉壁の衣装は彼女の指先まで及ぶ。そして、彼女のその指が、手がレイトを招く。こっちへ、こっちへ、と手招きをするたびにレイトの足が意思に反して勝手に動き出す。

「いや、やだ、ぁぁ！」
「ふふ、もうすでにボクの体の支配権は私のもの♡そして、その奥底の根本意志までも私のものに……♡ふふ……♡」

まるで処刑場へと、死の十三階段をのぼるように、快楽の魔窟へと足を進める。
滴る粘液、湧き出る溶液。桃色の官能的な香りを漂わせる愛液が肉壁より染み出していた。そして、それは感情に呼応するように、彼女の吐息に反応する。
彼女の吐息が荒く、熱を帯び、そして、情欲を宿す。
頬を朱に染め、まるで本当の淫魔のように、艶然と笑みを浮かべる。

「ぁぁ、たまらない♡」

彼女の衣装からも桃色の粘液が滴り、全身を濡らす。まるで乙女が発情して、ホトを湿らすように。

「さぁ♡」

防衛線はすでに跨ぎ終わり、目の前に地獄の棺桶が横たわる。

「ほら、ボクのことを欲して、ピクピク震えているわ♡」

振動、蠕動、脈動する肉の棺桶。
まるで、秘部が陰茎をねだるように、肉の箱も被食者を求める。

首筋を指が撫でた。彼女の手だ。その指先を同じ愛液で濡らし。

「さぁ、ボク♡お食事のお時間ですよ♡」

「やだ……ぁ……ぁ……」

一歩、一歩、意思に反して足が前へ進む。背後をついて歩くサキュヴィルス。

そして、最後の一歩、その手前で体が向きを変えた。もちろん、自分の意志でない。

視線が怯えるレイトを射抜く。

ゾッとするほど、情欲の炎を宿した瞳。魔に魅入られたような感覚がレイトを襲う。

「さぁ、ボク♡お食事のお時間ですよ♡」

再度告げられる同一の言葉。だが、そこに今度は別の言葉が続いた。

「わたしのお食事♡」

体を押し付けるように、彼女が抱きついてきた。

ぬるりとした肉襞が肌を舐め、得も言われえぬ陶酔感を一瞬味わう。そして、訪れる、刹那の浮遊感。そして、粘液をぶるんと弾む肉壁に背を抱きとめられると、棺桶の扉が勢いよく閉じられた。

「いただきま〜〜す♡」

真っ暗の中、響いた彼女の声。

途端蠢きだす肉壁。蠕動に次ぐ蠕動。全身を舐めしゃぶるように、背を、腕を、足を這いずる触手と繊毛。そして、体の上で全身を擦りつけるように、サキュヴィルスが踊る。

とめどないウィルスの奔流。注ぎ込まれる魔の媚薬ウィルス。絶頂のプログラムが脳を、思考領域を瞬く間に侵食して……。

「ぁぁがぁぁぁ〝ぁ〝――♡♡♡」

絶叫と喘叫（ぜんきょう）。

「あは♡いい声♡その声も全部、食べてあげる♡呑み込んであげる♡ボクはお姉さんのオマンコストマーチに捕まった哀れなセキュリティーくん♡さぁ、もっといい声で叫びなさ

い♡ボクの体を包み込みながらいやらしく踊ってあげる♡いっぱいア・ク・メ♡しましょうね～♡」

「うぐぅ♡おぉぉぉーー♡」

巨大な幾枚の舌に全身を舐められるような感覚。肉壁に生えそろったツブツブのイボが腕を、足を優しく撫でる。蠢き、抱き留め、優しく体を粘液に浸され、しかし体の上では凶悪な襞と繊毛だらけの女肉が踊り、レイトを陵辱する。

まるで口腔の中で、舌で味わいつくされる食物のように。

「お姉さんが味わい尽くしてあげる♡ボクのその全身を♡ボクの理性を、グズグズに、ドロドロに、トロットロに溶かして、全部全部呑み込んで♡あはは♡最後には、ボクはわる～いウィルスに侵食されきって、私のおもちゃ、ペット♡ほら、ボクのオチンポも、早く食べてほしいっておねだり♡」

未だに射精に至ってないのが不思議なほどに膨張した陰茎。

淫猥な手つきで撫でられるたびに体が跳ね上がる。声が漏れる。甘く、切ない声が。

「ボクのことは、全部食べてあげる♡オマンコでおちんぽを♡ボクの可愛いお口もお姉さんのお口で、舌で、おしゃぶりして♡……ん♡」

「うむ!!」

唇を塞がれる。途端、甘い、甘い果物味わいが味覚に広がる。

突如襲う強烈な安堵。

凝り固まった緊張感がごっそり抜け落ちる。警戒アラートを永遠なり響かせていたセキュリティーシステムが瓦解する。

「もういいのよ♡全部忘れて、ただ、メスに犯されるだけの雄へとなり果てなさい♡じゅる♡じゅぶ♡むちゅ……じゅぶぶ♡」

舌による蹂躙が始まる。

頭の中へ何かがインストールされていく。欲求、そう欲求だ。途轍もない射精への欲求が募り、射精への至るプロセスが脳内にインストールされていく。

そこで、陰茎が温かくぬめった肉壺に咥えられる。ねっとり濡れたホト。射精へと至るプロセスが実行されたのだ。

それが崩壊の合図だった。

精がほとばしる。大量の溜め込んだ欲望が吐き出された。

「んぐぅ……♡むぅぅぅーー♡」

どびゅぶ♡ぶびゅ♡ぶびゅぅぅどっぴゅん♡どぶびゅくびゅくどぷん♡

膣内に注がれる精の濁流。それを嬉々としてほおばるサキュヴィルス。
塞がれた唇から漏れる喘ぎ声に、彼女が目を細めた気がした。
暗闇の中で視界を封じられてもなお感じる彼女の嗜虐の瞳が。
そして、それは間違いではなかった。
彼女の腰が、激しく打ち付けられる。ぶちゅっ、ぶちゅっと卑猥な水音を奏でながら、何度も何度も打ち付けられ、精を搾り出していく。

「ううぐぅぅぅーー♡」

また噴き出す、精の放出。
何か大事なものが抜け落ち、奪われていく。だが、それは、実に甘美な心地だった。
奪われているにも関わらず、陶酔と恍惚に溺れ、彼女に心酔していく。
理性が溶け落ち、目の前の女性がいとおしく思われていく。
それがウィルスの効力とわかっていても、いや、それすらもわからなくなっていき……。

「むじゅ……♡じゅる♡ほらぁ……♡むぅちゅ……♡もっと、出せ♡もっと、アクメしろぉ～♡むじゅじゅるる♡ん、はぁ……♡気持ちいいでしょう♡心地いいでしょう♡全身をメスの中に収納されて、貪られて、食べられる♡お射精ぴゅっぴゅの度に、ボクの演算能力が奪われちゃう♡あぁ、大変ですね～♡弱～くされちゃう♡もう、これ以上弱くなったら、ウィルスに負け放題♡気持ち良くされ放題♡永遠に全身を舐めしゃぶられて棺桶から出られなくされちゃう♡……じゅぶ、じゅるる、ぶちゅじゅる……♡」
「んぐぅ……♡ん　ぅ♡ん　ぅ♡」

漏れる。漏れ出す。溢れ出す。
どくん、どくんと彼女の中へ白濁の精が搾り取られていく。
その彼女はがっしりと体を抱きしめ、愛し合う乙女のように腰をくねらせ、打ち付ける。胸板に乳房が触れる。突起だらけの味蕾のような皮膚が擦りつけられるたびに、ウィルスがより深くに注入されていく。腹部同士が触れ合えば、脳に電流が走るような歓喜に包まれ、絡みつく足は触手のように縦横無尽に性感帯と化した皮膚を嬲る。
どんどん演算能力が失われ、暗い暗い闇の中へ沈んでいくように、快楽へ溺れていく。

「……じゅるる♡ん、ぷぅ♡……ふふ♡もっと、もっと食べさせて♡味合わせて♡ボクの甘い味わいを♡この棺桶も、お姉さんの衣装も、全部お姉さんのもの♡お姉さんのプログラム♡お姉さんの舌♡抗うの？抗えるの？もう、そんな演算能力ないよね……♡うふふ、もっと貪ってあげる♡ボクが完全に堕ちて、お姉さんのいうことをなんでも聞くようになるまで♡全身でボクのことを……♡」

「やぁ……へぇ……♡」

演算能力を貢ぐように射精を繰り返し、意識領域まで維持できないレベルまで奪われてしまった。

だんだんと意識が暗くなる。それでも、彼女は体の上で踊る。

ねっとりと絡みつく膣を上下に振り乱し、上半身から下半身に至るまでレイトの皮膚を舐めしゃぶるように肉襞の衣装を押し付けて、その姿態をくねらせる。トロトロと体にまとわりつく粘液を塗り伸す動きで肉布団が背面を抱きかかえる。

ここは肉牢の棺桶。

このまま、溺れれば、文字通りここがレイトの墓場と……。

そして、瞬く間に浮かんだ思考は、深く暗い闇の中へ連れ込まれて、レイトというセキュリティーは棺桶の中へと沈んだ。

……♡

……♡

……♡

♡♡♡

＊＊＊

ギーっという音と共に扉を開く。

「はぁ♡おしぃかった♡」

“肉触手の姦桶”の中に光が差し込む。むわっとした熱気を振り払うように、ハイネは髪を振り乱す。
そして、指一鳴らし。
パチン、というその一瞬で体の衣装がポリゴン状に変化し、再構築される。元のラバースーツに早変わりだ。髪を、肌を濡らしていた体液もすべて綺麗になくなっている。
「ふふ♡ボク♡おいしかったですよ♡全部吸っちゃった♡あは♡」
蠢く肉触手の姦桶の中で未だ肉布団に包まれたままの少年AIは虚ろな瞳で虚空を眺め、開いた口から涎を垂らしていた。時節体をピクピクと震わせているが、それが今彼にできる唯一の表現方法なのだ。
絶頂ウィルスに誘惑系ウィルスをふんだんに混ぜ込んで注ぎ込み続け、演算能力を搾り尽くした結果、そう、もう彼はセキュリティーAIでなくなってしまった。
「うふふ♡なんて、無様なんでしょう♡あはは♡」
誘惑に抗うことをしなければ、もっと優しく可愛がってあげたというのに。
「さぁ、ボク♡最後のお仕事♡あの、邪魔な防衛線を、け・し・て♡」
バリンという音と共に砕け散る防衛線。
「ふふ、お利口さん♡」
「ほんと、いい子ですね♡」
そこに現れた声。
「あら、ネメッサ♡もう、追いついてきたの？でも、残念♡彼のエッチなエキスは私が全部もらっちゃいました♡」
「あら、ならあなたから直接吸い取ればいいのかしら？」
ネメッサ。
ハイネ以上の演算能力をもつサキュヴィルス。
ほっそりとした全身を包むのは黒とピンクを基調としたナース服。細身なウエストと反対にあふれんばかりの乳房は、押しとめるように巻かれた二本の細いベルトにて辛うじて

衣服の中に押しとどまっているようにされている。その谷間部分は大きく繰りぬかれハートマークの穴が開いていた。二本のベルトによって寄せられた豊乳が、その間から溢れそうになっている。腹部から恥部に至る部分が同様に繰りぬかれ、肌色の露出が大きくなっている。その間から淫靡な色のショーツがあられもなく晒されていた。そして、肉付きのいいお尻と太ももはその丈の短いスカートでは隠し切れず、境界線が丸見えだった。

「そんなのダメですよ♡ですから、これを通して……♡」
「うふふ♡かわいそうなことをいいますね♡」

これ、といい指をさしたのはもちろん姦桶で半分意識を飛ばしている彼のことだ。

「わたしが下、ですよ♡」
「先ほどまで、貪っていたのでしょう♡本当に貪欲な子ですね♡」
「これは、私のものなのですから、当然ですよ♡」
「では、わたくしはお口のほうから、ジュル♡いただきましょうか……♡」

二人で姦桶の中の少年を見つめる。
永遠と勃起し、呆けたように口を開き、虚ろな眼で虚空を見つめる少年。
抗い、抵抗の意を示していた元セキュリティーAIと同一のものとは思えないほど変わり果てた姿。

「さぁ、また……♡ぁぁん♡」

彼の突き上げんばかりに怒張したマラを、女陰にて一呑みにする。

「わたくしはこちらに……♡」
「んんむ……♡」

かすかにうめき声が聞こえた。
それは、ネメッサのホトに口を塞がれたために反射的に出た声だったのだろう。
極上のウィルスまみれのマンコで上も下も犯されれば、今の彼には耐えることすら不可能。
そして……。

「さぁ、受け取りなさい♡」
「吐き出しなさい♡」

子宮口がグンと落ち、陰茎の先っぽを呑み込む。そして、アクメウィルスに染まった演算能力がペニスを通じてレイトへと流し込まれた。それは甘いシロップのようにトロリと滴る粘液の形状をもって、彼の中へ送り込まれる。
徐々に、徐々に、と。
そして、一瞬、わずかばかりの演算能力を回復させ……。

「んぐぅぅッ ゙――――♡♡♡」

アクメウィルスにまみれた演算能力によって吸収した瞬間、幾十、幾百の昇天を実行する。そうすることで、抵抗するための余剰演算能力を残さないようにするのだ。
だが、それによって過剰な絶頂を強いられる彼は……。

「あぁ♡なんて、惨め♡矮小♡ゆえに、可愛らしい♡」
「わたくしのお股の下で鳴いておりますわ♡あはは♡もっと素敵なことしてあげますわね♡」

極上の快楽に壊され、おもちゃにされる彼は何百という絶頂を繰り返し、四肢を震わせ根本意志までも侵食される。
そこに、ネメッサの淫口が押し当てられる。そう、彼女の秘部がぐっと彼の口をほおばる。猛毒愛液滴るオマンコが。
しかし、彼女の目的は注ぎ込むことではない。むしろ吸い込むこと。
じゅるるっという音が響いた。

「あぁん♡おいしいぃ♡」

彼の口から勢いよく吐き出されるシロップ。そう、先ほどまで注ぎ込まれた演算能力が、今度は吸い出されていく。

「おいしい♡ボクもうれしいでしょう♡サキュヴィルスのドレインは極楽へ誘う快楽の極技♡ほら、イキなさい♡」
「んぐぅ!!ン ゙♡ん ゙♡んむぅんん――――♡♡♡」

震えていた四肢がのたうち、全身が激しく痙攣する。

だが、それもひと時。

「くす、ごちそうさま♡」

ネメッサが彼の顔より臀部を退ける。
オマンコから糸引く愛液。そして、彼の顔はその愛液でドロドロだった。
今度こそ完全に意識がなくなってしまった少年AI。
文字通り、サキュヴィルスのおもちゃとして弄ばれた成れの果て。

「じゃあ、わたくしは次に行きますので……」

そういい、姿をかき消すネメッサ。

「ふふ、ボク、本当に、可愛そうな子♡」

ジュル♡
知らず知らずのうちに舌なめずりをしてしまった。

「これから、たっぷりと私の性奴隷AIとして、いっぱい教育して、あ・げ・る♡」

ギーっと音を立てて、再び姦桶の扉が閉められる。
自分の部屋に戻ったら、どう調教していこうか、今から心躍った。
そして、ハイネも、姦桶も、なくなったそこは、非常な陵辱劇が行われていたとはだれも思えないほどあらゆる痕跡が残らず消され、浸食されたデジタル空間は白い箱へと変わっていた。
もうそこには何も残っていない。全てが奪われてしまったのだ。

次章へ
・セキュリティーAI『エンボス』vsサキュヴィルス『ネメッサ』　【恥療】